

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ポルトガル語の人称不定詞の用法と文法的特徴
Author(s)	坂東, 照啓
Citation	ニダバ , 27 : 28 - 37
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048026
Right	
Relation	



ポルトガル語の人称不定詞の用法と文法的特徴

坂 東 照 啓

0. はじめに

ポルトガル語において、人称不定詞は、鼻母音、接続法未来と並んで一般に注目される言語的特徴の1つである。人称不定詞は、法、時制による規定はされないが、その名称が示す通り人称（及び、数）を有し、主語によって形式が変化するという不定詞である。そもそも、一般的に不定詞とは、人称、数、法、時制などの文法範疇によって規定されていない形式のことであり、ポルトガル語には、この一般的な定義に従う普通の不定詞も存在する。しかし、この普通の非人称不定詞とともに、主語の人称によって形式が規定されるという人称不定詞も存在するのである。

ポルトガル語における人称不定詞は、歴史的観点からも、ラテン語に存在しなかったということだけではなく、同じイベロ・ロマンス語であるスペイン語においてさえも観察されない。人称不定詞が観察される言語は、ポルトガル語とガリシア語だけなのである。つまり、人称不定詞は、イベリア半島西北部のロマンス語であるガリシア・ポルトガル語において独自に発展した形態と考えられ、極めて特異的な存在となっている。

本稿では、まず人称不定詞の形態的特徴とその起源について述べ、次に人称不定詞の用法を非人称不定詞の用法とも対照させ、人称不定詞の基本的な統語的特徴について考察したい。

1. 形態構造

ポルトガル語には2種類の不定詞が存在する。1つは、一般的に不定詞としてみなされる性質を備えており、法、時制、人称（・数）などの文法範疇による規定を受けない不定詞である。もう1つは、法、時制には制限されないものの主語の人称に応じて変化するという不定詞である。後者は、人称を有するという特徴から人称不定詞 (*infinitivo pessoal*)、あるいは屈折変化をするという特徴から屈折不定詞 (*infinitivo flexionado*) と呼ばれている。こ

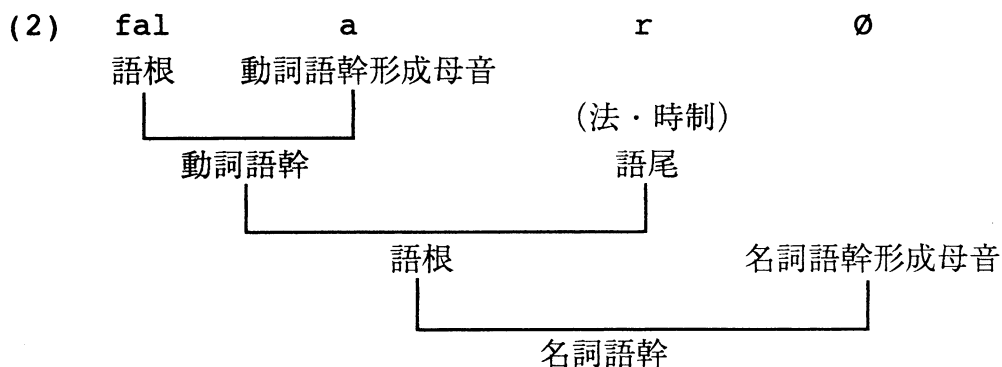
の人称不定詞は次のような形態をとる。

(1) 不定形 **falar** 「話す」

1 人称単数	falar	1 人称複数	falamos
2 人称単数	falares	2 人称複数	falardes
3 人称単数	falar	3 人称複数	falarem

1 人称単数と 3 人称単数については、人称を持たず屈折しない不定詞、すなわち非人称不定詞と同形である。この人称不定詞の活用について、(1) に示した **falar** は第 1 規則活用動詞であるが、第 2 ・ 第 3 規則活用動詞、あるいは不規則動詞でも同様の変化をする⁽¹⁾。

一般に不定詞の機能は、動詞的性質を保持しながら名詞 (**substantivo**) の役割をも果たすところにあると考えられる。このような動詞の性質だけでなく名詞であるとかあるいは形容詞、副詞といった名詞類 (**nome**) の性質を兼ね備えていると考えられる形態としては、非人称・人称不定詞、現在分詞、過去分詞がある。この非人称・人称不定詞、現在分詞、過去分詞は、法・時制を示す他の活用形とは区別され、動詞の名詞類形態 (**forma verbo-nominal**) とみなされている⁽²⁾。動詞の名詞類形態は、構造的にも、その機能上の特徴と同様に動詞と名詞の特徴を同時に持っていると分析される。非人称不定詞 **falar** の形態は (2) のように分析される。(∅ はゼロ形式を示す)



人称不定詞は、(2) に示した形態構造を持つ非人称不定詞から、さらに人称を示す語尾が付加される形態である。(3) が人称不定詞のそれぞれの人称を示す形態である。

(3) 1 人称単数 ∅ 1 人称複数 **mos**

2 人称単数	es	2 人称複数	des
3 人称単数	ø	3 人称複数	em

この人称不定詞の形態の構造は、名詞語幹の後に（3）に示した人称を示す語尾が付くという点において特異的である。というのは、普通の名詞の形態は、名詞語幹の後に続く語尾は性、数を示す語尾であり、人称を示す語尾は付かないからである。逆に、普通の名詞の場合に語幹の後に付く性、数を示す語尾は、人称不定詞の名詞語幹には付かない。

2. 人称不定詞の用法

人称不定詞の用法については、ポルトガル語文法において最も多く議論されてきた問題の1つである。特に人称不定詞と非人称不定詞の使い分けという観点からは、**Jerônimo Soares Barbosa**、**Frederico Diez**をはじめ、文法家はさまざまな規範的な規則を提示してきた⁽³⁾。しかし、現在では、この2つの不定詞の使い分けについては、文体論的要因も関係し、統語論上絶対的な規則を考えることはできないという結論にほぼ至っているようである。

一般的な文法書でも、人称不定詞と非人称不定詞の選択について、これを完全に決定する規則はないとしている。ただし、人称不定詞が一般的に用いられる傾向にある場合ということでは、大体3つから4つにまとめられている。

まずその1つは、不定詞の主語が主節の主語と異なる場合である。

(4) **Não sairemos daqui sem meus amigos chegarem.**

「私の友達が到着しない限り私たちはここから出ません」

(5) **Todos acreditam sermos os culpados.**

「みんな私たちが犯罪者であると信じている」

（4）では人称不定詞の主語である **meus amigos** が明示されているが、（5）では人称不定詞の主語は明示されていない。このように人称不定詞の主語についても、時制を有する定形動詞の主語の場合と同様に、明示されることも明示されないこともある。人称不定詞の主語は、必ずしも明示されるとは限らないのである。

2つめは、不定詞の主語が主節の主語と同じであっても、特にその不定詞が主節の前に置かれている場合である。

(6) **Apesar de estares com gripe, não tens febre.**

「君はインフルエンザにかかっているいるにもかかわらず、熱がない」

(7) *Depois de eles chegarem, viram as ruínas.*

「彼らは到着した後で遺跡を見た」

3つめは、不定詞の主語が不特定である場合に3人称複数形にするという場合である。

(8) *Ouvi baterem à porta.*

「私はドアをノックする音を聞いた」

(8)は不定詞の3人称複数形であるが、時制を有する定形であっても3人称複数形によって主語が不特定であることが示されうる。つまり、時制の有無にかかわらず、3人称複数形は不特定の主語を示しうるということである。

上に挙げた3つの場合以外では、さらに不定詞の主語の強調・明確化、リズム、響きといった文体上の理由によっても人称変化しうると述べられている。

こうした人称不定詞の用法についての記述は、基本的には正しいと言えるであろう。このような記述は、人称不定詞の用法の目安として大いに参考となるものである。しかしながら、人称不定詞の本質的な統語的特徴に関わるような記述はこれまでの文法書では見受けられない。しかも、実際、不定詞の主語が主節の主語と異なっても不定詞は人称変化しない場合もあるし、人称不定詞が常に非人称不定詞に言い換えられうるというわけでもない。詳しくは4章で検討するが、人称不定詞が必ず用いられる場合、非人称不定詞が用い必ず用いられる場合、人称不定詞と非人称不定詞のいずれもが用いられうる場合が存在するのである。

3. 起源

人称不定詞はラテン語には存在しないものの、ポルトガル語の最も古い時代の文献からもすでにその存在が確認される。しかし、その起源については定説はなく、従来からイベリア半島の基層言語の影響によるという説、ラテン語の接続法未完了過去に由来するという説、非人称不定詞を基礎としたガリシア・ポルトガル語における内的創造であるという説などが唱えられている。今日では、その中でも、接続法未完了過去に由来するという説が最も有力視されているようである。

そのラテン語の接続法未完了過去は、*amō* を例にとると次のような活用形を示す。

(9)	1 人称単数	amārem	1 人称複数	amārēmus
	2 人称単数	amārēs	2 人称複数	amārētis
	3 人称単数	amāret	3 人称複数	amārent

この形態は、現在幹 + **re** + 人称語尾である。しかし、ここで母音の長短を考えなければ、現在不定法 (**amāre**) + 人称語尾になっている。まさにこの接続法未完了過去の形態の構成が、ポルトガル語の人称不定詞と同じなのである。

この形態上の共通点は、接続法未完了過去由来説が支持される強い理由の1つである。この説では接続法未完了過去から時制が失われ、不定法に変化した経緯について説明が求められるが、次のように考えられる。つまり、本来接続法は時間関係の流動的な法ではあるが、接続法未完了過去の場合、その形態上の特徴から、これが同じく従属節で用いられるという環境にある不定詞の人称変化した形として解釈されるとともに、機能上もその無時間的特徴から時制を持たない不定詞と収束していったということである⁽⁴⁾。

4. 不定詞の主語

非人称不定詞と人称不定詞の使い分けについては、2章でも述べたように一般には明確な規則が存在するという記述ではなく、どちらが普通は使われる傾向にあるかという記述がなされている。しかし、この記述が単純に人称不定詞と非人称不定詞は常に言い換え可能という結論につながるものではない。2つの不定詞のいずれかが必ず用いられる場合もある。この言い換えの可能性には不定詞の主語が関係していると考えられる。

4. 1. 人称不定詞と非人称不定詞の言い換え

(10) と (11) の場合においては論理的意味が同じである。

(10) **Nós chegamos muito cedo para falarmos com ela.**

「私たちは彼女と話すためにとても早く着いた」

(11) **Nós chegamos muito cedo para falar com ela.**

非人称不定詞を用いた (11) ではその動詞が表わす行為自体に焦点が向けられているのに対し、(10) では人称不定詞を用いることによって、その主語を強調するというニュアンスの差はある。しかし、いずれの不定詞の使用も認められ、(10) と (11) は言い換えが可能である。

(10) と (11) が論理的に同じ意味を表わし、言い換えの関係にあるのに

対し、(12) と (13) は論理的意味が異なる。

(12) **Cremos estarem cansados.**

「私たちは（彼らが）疲れていると思う」

(13) **Cremos estar cansados.**

「私たちは（自分たちが）疲れていると思う」

(12) と (13) は、いずれも文法的に正しい文ではあるが、その意味は異なる。(12) では、人称不定詞 **estarem** の（意味上の）主語が主節の主語とは異なり 3 人称複数であるのに対し、(13) では、非人称不定詞 **estar** の主語は主節の主語と同じ 1 人称複数と解釈されるのである。従って、論理的に意味が異なる (12) と (13) は、言い換えの関係にあるとは言えない。

人称不定詞を用いた (12) の場合、文法的に正しい文でありながら、非人称不定詞を用いた (13) には言い換えられないというものであったが、次の人称不定詞を用いた (14) , (15) のような場合は文法的にも誤りとされる。

(14) ***Podemos irmos ao cinema.**

「私たちは映画館に行くことができる」

(15) ***Os alunos costumam voltarem cedo.**

「生徒たちはいつも早く帰る」

(14) , (15) ではそれぞれ不定詞が主語の人称に一致して変化しているが、文法的ではないとみなされる。(14) , (15) における人称不定詞は文法的ではなく、それぞれ (16) , (17) のように非人称不定詞が用いられる。

(16) **Podemos ir ao cinema.**

(17) **Os alunos costumam voltar cedo.**

(16) , (17) における不定詞は、その主語が主節の主語と同じであったが、さらに、不定詞の主語が主節の主語と異なる場合でも不定詞が人称変化しない場合がある。

(18) a. **Mandei-os entrar.**

「私は彼らに入るように言った」

b. ***Mandei-os entrarem.**

(18a, b) における主節の主語は明示されていないが1人称単数で、不定詞の主語はこれとは異なる *os* である。従って、(18b) のように不定詞がその主語である *os* に一致した人称変化をしようと考えられる。しかし、(18b) は文法的ではなく、(18a) のように非人称不定詞が用いられるのである。2章でも述べたように、一般には不定詞の主語が主節の主語と異なれば人称変化するという傾向が認められるということからすると、(18a) より (18b) が用いられるはずである。しかし、(18a) のみが文法的で、(18b) は認められないということは人称不定詞の一般的な用法の規則から外れるものと言える。

(18a, b) は使役構文であったが、知覚構文においても不定詞の用法に関して同様の特徴が観察される。

(19) a. *Vi-os correr.*

「私は彼らが走るのを見た」

b. **Vi-os correrem.*

(19a, b) においても不定詞の主語は異なっており、もし不定詞の主語が主節の主語と異なれば人称変化するということが一般的な傾向であるとする、不定詞は人称変化し、(19a) より (19b) が多く用いられるはずである。しかし、実際にはこの場合においても (19b) は文法的ではなく、(19a) のみが認められるのである。

4. 2. 不定詞節の構造

前節で、使役構文、知覚構文において不定詞の主語が主節の主語と異なっているにもかかわらず人称変化しない場合があることを指摘した。しかし、(18b) が文法的でないのに対し、(20b) は認められる。

(20) a. *Mandei os meninos entrar.*

「私は少年たちに入るように言った」

b. *Mandei os meninos entrarem.*

(18b) と (20b) の違いは、不定詞の主語が前者では直接目的格代名詞 *os*、後者では名詞句 [*os meninos*] となっているところだけである。そうすると、人称不定詞が用いられた (18b) が文法的でないのは、この不定詞の主語が代名詞化されているためではないかと考えられる。しかし、(21) は認め

られるのである。

(21) **Mandei eles entrarem.**

(20b) における不定詞の主語名詞句[os meninos] が主格代名詞 **eles** に代わっている (21) は文法的である。(18b) と (21) ではいずれも不定詞の主語が代名詞化されているが、それが直接目的格である (18b) が文法的でないのに対して、主格である (21) は文法的なのである。つまり、不定詞の主語が、(20b) のように代名詞化されていない名詞句であるか、(21) のように代名詞となっても主格であれば文法的で、(18b) のように直接目的格代名詞となっている場合のみ文法的でないのである。

こうした (18b) , (20b) , (21) の文法性の差を考えると、人称不定詞の出現にはその主語の文法的特徴が関係していると言える。ここで不定詞の主語について、人称不定詞はその主語に人称が一致するという基本的な性質から考えると、(20b) における **os meninos**、(21) における **eles** は確かに人称不定詞の主語としての機能を担っているとみなされるが、(18b) において人称不定詞が用いられないということは **os** が主語として機能を担っていないということになる。すなわち、(18b) は (22) 、(20b) は (23) 、(21) は (24) の構造を持っていると考えられる。

(22) ***Mandei-os_i [t_i entrarem].**

(23) **Mandei [os meninos entrarem].**

(24) **Mandei [eles entrarem].**

(18b) においては、**os** が主節の目的語位置に繰り上がっており、不定詞の主語の位置にはないので、不定詞は人称変化を起こさないと分析される。そうすると、(20b) に対し、非人称不定詞が使われている (20a) の場合、(25) の構造を持つと考えられる。

(25) **Mandei os meninos_i [t_i entrar].**

(20b) の **os meninos** が不定詞の主語の位置にあるのに対し、(20a) の **os meninos** は主節の目的語位置に繰り上がっていると分析される。つまり、(20a) では、**os meninos** が直接目的格代名詞とはなっていないものの主節の目的語の位置にあり、不定詞の主語の位置にあるわけではないので人称変化

しないと考えられる。

5. 結論にかえて

人称不定詞の用法については、これまでさまざまな記述がなされてきたが、不定詞が人称変化するかどうかということ自体は、それ自身の主語が存在するかどうかということにかかっていると考えられる。不定詞に主語が存在すれば、それが音形を持つ持たないにかかわらず、人称変化をし、存在しなければ人称変化しない。従って、(14), (15) が文法的でないのは、不定詞が主語を持ちえないためと言うことができる。(14), (15) では、主文の動詞が主文の主語と不定詞節の主語と同じであることを要求し、不定詞が独自に主語を持つことを許さないと考えられるのである。逆に、主文の動詞が不定詞節に独自の主語を許すものであって、不定詞の主語が存在するのであれば人称変化する。この場合の不定詞の主語は、(10) のように、主節の主語と同一で音形も持たないということもありうる。ただ、(10) のように不定詞の主語を用いるか、あるいは(11) のように用いないかということは、文法的な問題というより文体論上の問題と考えられる。

【注】

(1) (1) に示した人称不定詞の活用形は、接続法未来と全く同形である。しかし、人称不定詞と接続法未来の活用形がすべての動詞において同じというわけではない。確かに、*falar* のように語幹に変化が起こらない活用をする動詞の場合、人称不定詞と接続法未来は同形となる。しかし、完了時制において語幹に変化が起こる不規則動詞の場合、人称不定詞と接続法未来は異なってくる。例えば、不規則動詞である *ter* 「持つ」の人称不定詞が、1 人称単数 *ter*、2 人称単数 *teres*、3 人称単数 *ter*、1 人称複数 *termos*、2 人称複数 *terdes*、3 人称複数 *terem* であるのに対し、接続法未来は、1 人称単数 *tiver*、2 人称単数 *tiveres*、3 人称単数 *tiver*、1 人称複数 *tivermos*、2 人称複数 *tiverdes*、3 人称複数 *tiverem* である。しかも、規則動詞、及び準規則動詞において接続法未来の活用形が人称不定詞と同じであっても、その形態構造は同じではない。というのは、法・時制を有する接続法未来の形態は、語幹と法・時制、人称を表わす語尾から成っていると分析されるからである。*falar* の接続法未来 1 人称複数であれば、語根 *fal* と幹母音 *a* から成る語幹 *fala* と法・時制を表わす *r* と人称を表わす *mos* という語尾に分析され、この形態構造は人称不定詞とは異なるものである。

(2) *nome* は狭義の名詞 (*substantivo*) のみを意味する用語ではなく、名詞、形容詞、副詞を意味する用語である。非人称不定詞、人称不定詞は動詞の名詞としての形態であり、過去分詞は動詞の形容詞としての形態であり、現在分詞は動詞の副詞としての形態であるとみなされる。

(3) *Jerônimo Soares Barbosa* の規則は、「不定詞の主語が固有である場合、すなわちこれを支配する定法(*modo finito*)の主語と異なる場合に、人称不定詞を用いる。しかし、主語が共通である場合には非人称不定詞を用いる」というものであり、*Frederico Diez* の規則は、「不定詞が定法に展開されうらば、不定詞は人称変化させるべきで、そうでない場合には非人称のままとなる」というものである。

後者の場合、「定法に展開されうら」というのは、不定法に対する定法、すなわち直説法あ

るいは接続法の節に言い換えられるという意味であり、確かに、不定詞節が時制節に言い換えられない (ia) は人称変化しないのに対し、不定詞節が (iib) のように時制節に言い換えられる (iia) では人称変化する。

(i) a. Deves estudar/*estudares latim.

「君はラテン語を勉強すべきである」

(ii) a. Desejamos serem felizes.

「私たちは、彼ら（／彼女たち）が幸せであることを望みます」

b. Desejamos que sejam felizes.

しかし、(iia) の場合、(iib) に言い換えられるにもかかわらず、(iiic) は文法的でないとみなされる。

(iii) a. Vi-os sair.

「私は彼らがでかけるのを見た」

b. Vi que eles vinham.

c. *Vi-os sair.

つまり、不定詞節が時制節に言い換えられても人称変化せず、このことは F. Diez の規則に反する。同時にまた、(iiic) のように主節の主語と不定詞の主語が異なるにもかかわらず人称不定詞が用いられないということは、F. Diez の規則だけでなく、J. S. Barbosa の規則にも反している。このように、J. S. Barbosa の説も F. Diez の説も不完全な記述ではあるが、これら 2 つの説には、不定詞と非人称不定詞の用法に関する議論の出発点になったという歴史的な意義が認められる。

(4) 人称不定詞が接続法から機能変化したとは考えにくいとしてこの説を疑問視する立場もある。この点について、内的創造説であれば、非人称不定詞がもとになっているという考えであるから、こうした機能変化を考えずに済む。しかし、一方で、内的創造説では、不定詞に人称語尾を付け変化させることになった理由、対格であった不定詞の主語に主格が用いられるようになった過程について説明する必要がある。

【参考文献】

- Ali, M. Said. (1964): *Gramática Secundária da Língua Portuguesa*. Melhoramentos. São Paulo.
- Cunha, Celso. & Luís F. Lindley Cintra. (1985): *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. Nova Fronteira, Rio de Janeiro.
- Goes, Carlos & Herbert Palhano. (1960): *Gramática da Língua Portuguesa*. Francisco Alves. Rio de Janeiro.
- Maurer Júnior, Theodoro Henrique. (1968): *O Infinito Flexionado Português*. Nacional, São Paulo.
- Miguel, Jorge. (1989): *Curso de Língua Portuguesa*. Harbra, São Paulo.
- Perini, Mário A. (1977): *Gramática do Infinitivo Português*. Vozes, Petrópolis.
- Sacconi, Luiz Antonio. (1990): *Nossa Gramática - teoria*. Atual, São Paulo.
- Thomas, Earl W. (1969): *The Syntax of Spoken Brazilian Portuguese*. Vanderbilt University Press, Nashville.
- 友田金三. (1973): 「不定詞の人称変化 — ポルトガル語の特有語法 —」 『京都外国語大学創立25周年記念論文集』 pp.125-144.